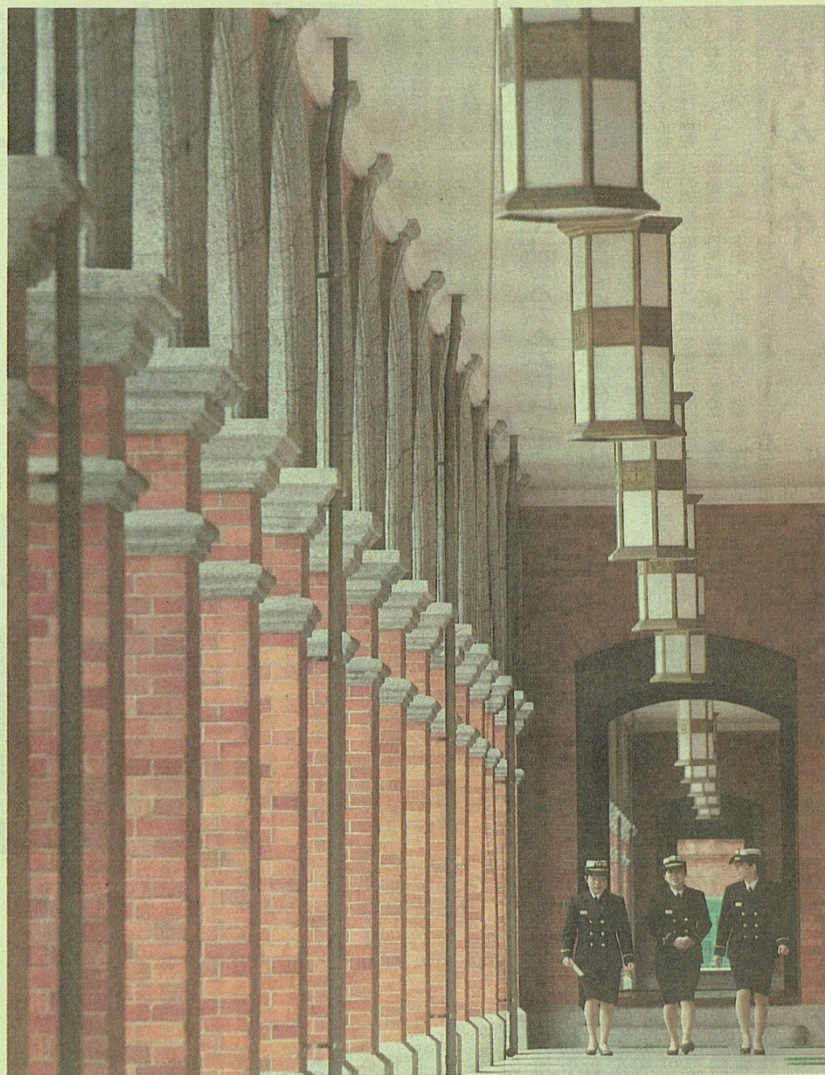




海上自衛隊幹部候補生学校(旧海軍兵学校)の赤レンガは、今でも昔の色を失っていない—写真 高谷隆

阿川弘之「井上成美」

広島・江田島市

海からの微風に乗って校が散っていく。瀬戸内海に浮かぶ江田島の海上自衛隊幹部候補生学校。卒業式が3月20日に行われ、女性を含む2000人余りが練習艦隊に乗り込み、家族に見送られて世界一周の実習航海に旅立った。そのなかに阿川弘之氏(89)の孫の二郎氏がいた。

阿川氏は足腰が弱り、式典に参列できなかったが、幹部としての第一歩を踏み出した二郎氏にこうエールを送る。

「幹部候補生学校は、井上成美のようなすぐれた教育者がいた海軍兵学校の伝統をひいている。井上さんが理想とした笑いも遊びもあるシエントルマンになつてほしいですね。戦士であるより前に人間

文学周遊

270

軍人を神格化するなど、
もってのほか
以ての外の沙汰です

として立派な人」最後の海軍大将として知られる井上成美は、一貫して対米戦争に反対した。軍務局長時代は米内光政海相や山本五十六次官とともに日独伊三国同盟締結阻止に全力を尽くした。海軍としての知性派として将来の戦いは戦艦ではなく、航空機が主力になるとみて、巨額の金を食う大和、武蔵の建造などを中止すべきと提言したが、採用されなかった。

阿川氏は豊富な資料や関係者の取材で井上の素顔を浮き彫りにした。海軍兵学校長のとき、陸軍士官学校が入学試験から英語を除外しても「外国語一つ真剣にマスターする気のないような少年はいらない」と最後まで入学試験に英語を課したことなど。

「井上さんが重視された幅広い教養や合理精神は普遍的です。いまの幹部候補生学校

の外国語教育やしつけ教育に生かされています」と3月末で勇退した幹部候補生学校の野井健治前校長(57)。

広い校庭の芝生を横切ってギリシヤ神殿風の教育参考館に入る。東郷平八郎や秋山真之などの海軍関係者の遺品が展示されている。歴代海軍大将の写真も飾られている。井上校長はこれらの写真を全部取り外せと命じた。「おのちに半数、国賊と呼びたい人間

がいる。そういう者の肖像を生徒に見せるわけにはいかない」と語ったという。

「これいお爺さんでした。食べ物を残すと、次には必ずその食べ物が出てきた」と井上と暮らしたことのある孫の丸田研一氏(69)。井上が戦後30年近くを過ごした三浦半島の長井の自宅はいま記念館となり、戦争を知らない若い世代が訪れている。

(編集委員 浦田憲治)



あがわ・ひろゆき(1920—) 広島市生まれ。42年東京帝大国文科を繰り上げ卒業し、予備学生として海軍に入る。大尉として復員後、志賀直哉に師事。53年『春の城』で読売文学賞を受賞。同世代の戦死者への鎮魂の思いを込めた作品や海軍提督を描いた作品などで知られる。99年文化勲章、2007年菊池寛賞を受賞。日本芸術院会員。主な作品に『雲の墓標』(山本五十六)(新潮社文学賞)、『軍艦長門の生涯』(米内光政)(志賀直哉賞)(野間文芸賞)、『食味風々録』(読売文学賞)など。提督3部作の最後の『井上成美』は無謀な戦争に反対した軍人を描き、日本文学大賞を受賞。乗り物好き、食道楽として知られ、軽妙な随筆も多い。(作品の引用は新潮文庫)

